



美和神社

織都桐生千三百年の歴史を見守り続けた 群馬県内有数の古社

毎秋の風物詩「えびす講」で大いに脚光を浴びる桐生西宮神社の左脇に位置する美和神社は、陰に隠れた存在として映るかもしれない。しかし、桐生西宮神社はあくまで境内摂社であり、この境内地を有する本社は、他ならぬ「美和神社」である。

その歴史は古く、延暦15年（796）には桐生市広沢町の賀茂神社、玉村町の火雷神社とともに国の保護を受けた官社として列せられた記録が残る。さらに遡るとされる創建に関する具体的な記録は残されておらず未だ謎に満ちているが、織都桐生千三百年の歴史以上の年月を歩んだ、群馬県内でも有数の歴史を持つ古社であることに変わりはない。延長5年（927）には官社をまとめた延喜式神名帳にその名が記されており、群馬県内では富岡市の貫前神社などと並び、延喜式内上野国十二社の一社に数えられる。

祭神の大物主大神（おおものぬしのおおかみ）は、その別称とされる大国（おおくに）主大神が「だいき」とも読めることもあり、江戸時

代までに七福神の一人「大黒天」と習合。この「だいきくさま」と並ぶ同格主祭神である相殿神（あいどののかみ）として、兵庫県西宮市の西宮神社から蛭子大神（ひるこおかみ）を明治34年（1901）に境内に奉詔遷座したのが桐生西宮神社だ。実は美和神社自体も、桐生の「えびす講」を語るに欠かせない存在なのだ。

明治41年（1908）には、現在の桐生祇園祭のルートである八坂神社（旧・衆生院）が美和神社に合祀され、現在も桐生祇園祭神輿出御・還御の拠点としても活気を見せる。

緑深い木々とともに、千年を優に超えるミステリアスな歴史に包まれた美和神社。これからも地域の日々と賑わいを見守りながら、未来へと歩みを進める。



【美和神社】

●住所／桐生市宮本町2-1-1